



ご縁があり、編集部から「山椿」の執筆依頼を受けました。これまでの執筆者を拝見すると、10期～30期のそれぞれ登録後40年弱～60年弱の大先輩ばかりです。「花水木」を執筆される新人世代からみて、弁護士登録40年～50年前後世代だけでなく、登録30年強の中堅世代からみた弁護士風景・所感も参考になればと思い、筆をとりました。

私は、昭和57年に弁護士登録し、加藤康夫弁護士の事務所に入り、9年間勤務弁護士をしました。ボス1人勤務弁護士1人の事務所で、一般民事事件のほか労働事件や倒産事件も学ばせてもらいました。加藤弁護士が平成2年度の二弁会長に就任された1年間で、事務所を守り(?)その翌年の平成3年に独立し、以来24年間、1人で事務所をしております。

私が加藤弁護士から教えられたこと、その後弁護士会で弁護士および弁護士会の信頼を維持し弁護士自治を守る系の委員会活動(綱紀委員、苦情相談員、非弁護士取締委員、倫理委員会委員、懲戒委員等)に関与することが多かったため、その経験から弁護士という職業の魅力と留意点について感想を述べさせていただきます。

確かに、私たちが登録した時代に比べ、この10年間で弁護士の人数も増え、就職も困難になり、スタートから借り入れをかかえている弁護士も多いという大変な時代とな



山口 健一 (34期)

●Kenichi Yamaguchi

っています。しかし、昔と環境は変わっても、やはり、自分に与えられた、あるいは巡り合った事件について、依頼者の立場に立って、地道に、誠実かつ適切に処理することが、新たな依頼者を生み、扱った同種事件を多く手がけることにより自信も専門性も磨かれていくという基本は変わらないと思います。

弁護士は、誠実かつ適切な事件処理をすれば、自ずから事件処理へのおもしろみ・やり甲斐も感じられ、依頼者も感謝してくれる、極めて魅力的な職業であることは今も変

わりがないと思います。

ただ、弁護士の仕事は、本来、その収入が安定しないものであるところ、ここ数年は弁護士人口が増えて、多少競争が行われるようになり、総体的に収入が低減化傾向にあるように感じます。

そのような環境の中で、意欲を持って弁護士業務に取り組むためには、経費のかけ過ぎを避け、生活のレベルも贅沢にしないことが重要になります(一旦、贅沢にすると生活のレベルを落とすことが難しくなります)。

要するに、損益分岐点を下げる(「入り」を計って、経費と生活費を適切な水準に抑える)のです。それにより、自分にとってやり甲斐があり興味を持って、「この依頼者のために力を注ごう」と思える事件の処理に集中できるような環境を作ることができ、これが20年～30年先のそれぞれの弁護士のハッピー・リタイアメント(少なくとも、不祥事を起こして晩節を汚さないこと)につながると思いますが。

■

Hanamizuki

花水木

14



機会があって本誌編集長に私の子育て生活をお話したことがきっかけで、執筆依頼をいただくこととなりましたので、今回は私の「育弁生活」をご紹介しますと思います。

私が弁護士登録をしたのは2014年12月で、本稿が掲載されるころに2年目に入るまさに新人弁護士です。弁護士になるまでに時間を要したこともあり、既に妻と男児（現在2歳9カ月）がおります。妻（旧60期）も同業者ですが、私より随分先に弁護士になっており、現在は第二子を妊娠中ながらバリバリと仕事をしています。

私の一日は大体、子どもを保育園に送ることから始まります。ご多分に漏れず、保育園への入園は激戦で、文京区（居住区）の認可保育園には毎年申し込んでいますが、共働きでも入園に必要な点数が足りず、毎回落選しています。結局、入園可能だったのは、子どもが生まれる前に申し込んだ新宿区の認証保育園だけでした。

子どもを送った後は出勤し、仕事を開始します。近時放送されたテレビドラマでもあったように、子どもの体温が一定ライン（私の子どもの場合には38℃）を超えると、保育園からお迎えコールがあり、仕事中でも迎えに行かなくてはなりません。お迎えコールのときや病気で保育園を休まざるを得

ないときは、妻と私の都合の付く方が対応していますが、事前にどちらも都合が付かないことが分かっている場合には、義母に頼んで静岡から駆けつけてもらいます。弁護士夫婦の場



阿部 広紀 (67期)

●Hironori Abe

合、家族やベビーシッターなど第三者のサポートがなければとても子育てできないのではないかと思います。

通常時でも、毎日午後7時には子どものお迎えに行かなくてはなりません。新人が午後7時で帰宅するのは珍しい話ですが、所属事務所の代表弁護士である小林哲也先生のご理解の下、原則として午後7時までに仕事を終わらせて帰宅し、不足する時間は帰宅後や早朝で補うようにしています。

帰宅後も育児は終わらず、むしろここからが本番です。夕食を食べさせた後、お風呂に入

れ、寝かしつけて漸く一日の育児が終了します。帰宅から寝かしつけまでは毎日怒涛のごとく時間が過ぎていきます。

夕食の後、お風呂に入るまでの短い時間が、一日の中で唯一子どもとゆっくり触れ合える時間です。親としては、その日保育園であった出来事などを聞きたいのですが（まだ2歳児ですので、作り話が本当か分からない片言の話ですが…）、子どもは大抵テレビを見せると要求してきます。先日は偶々映った歌番組にAKB48が出ていたところ、画面の前まで寄っていき嬉しそうに見ていました。しかし、その後男性歌手になった途端、「ダメ！ いや！ AKB～！」と怒り、「AKBお願いします！」とテレビに向かって叫んでいました（なお、私はAKB48のファンではありません）。その後、森高千里さんが出て『私がオバさんになっても』を歌っていたので、「お姉さん出たよ。」と言ったのですが、「おばさんだった…。」とガッカリの様子で、妻とともに大爆笑でした（森高ファンの皆様、すみません）。その後は、外出先でAKBの写真を見かける度に「パパ、AKBだよ！」と叫ぶので、私に向けられる周囲の視線と子どもの将来が気になるこのごろです。

■